

book

佐藤 優

読まずにはいられない

「見えない戦争」を 可視化する

2011年5月2日、パキスタンの首都イスラマバード郊外に潜伏するオサマ・ビンラディンを米海軍特殊部隊が殺害した。〈作戦行動に踏み切るに十分なインテリジェンスを得たと判断し、ビンラディンを捕えて正義を行う作戦を承認した〉／バラク・オバマ大統領は作戦の成功を見定めたその晩遅く、ホワイトハウスのイーストルームに姿を現わして、全世界にこう語りかけた。そこには一国のリーダーの決断とインテリジェンスのありようが比類のない簡潔さで示されている。インテリジェンスとは、単なる極秘情報などではない。国家指導者の最終決断の拠り所となる選り抜かれた情報なのである(28頁)

手嶋龍一氏による「インテリジェンスとは、国家指導者の最終決断の拠り所となる選り抜かれた情報である」という定義は、事柄の本質を突に

『ブラック・スワン降臨

——9・11-3・11 インテリジェンス十年戦争』

手嶋龍一著

(1500円+税/新潮社)

著者は元NHKワシントン支局長。2005年から独立し、外交ジャーナリスト・作家として活動している

photo 編集部・東川哲也

よく衝いている。国際社会において帝国主義的傾向が強まっている。その中で、日本が生き残るためにも政治エリートがインテリジェンスに関する国際基準での常識を身につけることが不可欠だ。

2001年9月11日の米国同時多発テロから2011年3月11日の東日本大震災までの10年間に起きた「目に見えないインテリジェンス戦争」を手嶋氏は可視化することに成功している。例えば、ウク



ライナと中国の結びつきだ。〈ウクライナは、ソビエト連邦の崩壊でロシアから分離独立を果たしたのだが、「旧ソビエトの兵器廠」といわれたこの国は、核兵器だけでなく航空機やミサイルの製造技術を受け継いだ。そしてその後を振り子のように揺れ動いてきた。／新興の大国、中国は、経済力にモノを言わせて、ウクライナの軍需産業から次々に新鋭の武器を調達してきた。

そんな中国を相手に、ウクライナは鶴のように立ちまわってきた。(中略) 両国は航空母艦「ヴァリヤーク」の売買を成立させると、武器の闇取引にいつそう磨きをかけ、ついには巡航ミサイルX55の取引にも手を染めていった(209頁)

世界をより深く読み解くために役立つ本だ。

さつ、まの、1980年生まれ。作家・元外務省主任分析官。近著に「インテリジェンス人生相談 復興篇」「外務省に告ぐ」「野蠻人の圖書室」などがある。